



日本記者クラブ

都知事選立候補予定者 共同会見

宇都宮健児氏（元日弁連会長）

小池百合子氏（衆議院議員、元防衛相）

鳥越俊太郎氏（ジャーナリスト）

増田寛也氏（前岩手県知事、元総務相）

（アイウエオ順）

2016年7月13日 14:00～15:30、10階ホール

東京都知事選（7月14日告示 31日投開票）に立候補を表明していた有力候補予定者4人が一堂に会し、記者の質問に答えた。このうち、宇都宮氏は、共同記者会見終了後の13日夜に、野党勢力の分裂回避を理由に立候補を取りやめる意向を表明し、立候補を見送った。

司会	小栗泉 日本記者クラブ企画委員（日本テレビ）
代表質問	川上高志 企画委員（共同通信）
	瀬口晴義 企画委員（東京新聞）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝小栗泉企画委員（日本テレビ） 本日は、東京都知事選に立候補を表明されています 4 人の皆さんを日本記者クラブにお招きいたしました。私は企画委員の小栗泉と申します。

最初に、立候補の方々をご紹介します。皆さんから向かって左から、あいうえお順にご紹介させていただきます。

まず、宇都宮健児さん。

宇都宮 宇都宮です。よろしくお願いします。

司会 小池百合子さん。

小池 小池でございます。よろしくお願いします。

司会 鳥越俊太郎さん。

鳥越 鳥越です。よろしく。

司会 増田寛也さん。

増田 増田寛也です。よろしくお願いします。

各候補予定者の基本的な主張は

司会 以上 4 人の皆さんで進めていきたいと思えます。

まず、きょうの進め方をご説明させていただきます。

最初に候補者の皆さんから立候補に当たったの基本的な主張を伺います。そして、その後、質疑応答に移らせていただきます。この質疑応答は、代表質問と、それから会場からの質問の二段階に分けて行いたいと思っております。代表質問は、日本記者クラブの代表質問者と、都庁担当の記者の代表、この 2 組が担当いたします。残りの時間、会場から直接質問をお受けしたいと思えます。

それでは、候補者の皆さんの主張を伺いたいと思えます。先ほど控室のほうでボードにお書きいただいておりますので、それを示しながらお話しいただければと思えます。発言時間はお一人 3 分です。

それでは、初めに宇都宮さんからお願いいたします。

宇都宮 ボードに書きましたのは、「“困っ

た”を希望に変える東京へ！！”というスローガンです。これは私たちのチラシのキャッチコピーでもありますけれども、東京にはさまざまな困り事があります。私は、安心して働き、安心して子育てができて、安心して老後が過ごせる、そういうような東京にしなければいけない。

つまり、都民の福祉の増進というのは都政の一番大きな役割だと思っております。地方自治法には地方自治体の主要な役割として、住民福祉の増進というのがあります。さまざまな首都外交というのがあると思えますけれども、やはり東京都政の一番中心は、都民の暮らし、生活を豊かにしていく、社会保障を充実させる、これが重要かと思っております。

ところで、いま東京は貧困と格差が広がってしまっていて、大変困った問題がたくさん起きております。都民の方も大変困り事を抱えております。例えば待機児童の問題、これは、東京は全国一の待機児童を抱えておまして、8,000 人を超えております。また、特別養護老人ホームに入れない高齢者も 4 万人を超えております。あるいは、貧困や格差のために、貧困家庭に育った子どもが、なかなか高等教育を受けられない、こういう問題があります。

それから、働くについては、若者がブラック企業でひどい目に遭っている。あるいは賃金が低い。非正規労働者として働いて、大変賃金が低い状況で困難を抱えている。東京の最低賃金は 907 円なんですけれども、日本の労働者の平均労働時間は、月に 150 時間働いて、13 万円ちょっとなんです。これでは、普通に働いて、結婚して子育てをする、これはとてもできません。

こういう状況を変えるために、私は、都の財政は非常に豊かな財政がありますので、待機児童のゼロを実現する。特別養護老人ホームに入れない高齢者をなくしていく。小中学校の学校給食を完全無償化する。高校の授業料を完全無償化する。あるいは、都立大学や都立の看護学校の授業料の半額化を実現する。それから、都独自の、返さなくてもいい給付型の奨学金を実現したい。

それから、最低賃金を上げるために、公契約条例をつくりまして、都の発注する公共事業を請け負う民間企業の労働者の最低賃金、1,500円以上の賃金を払っている民間企業しか都の公共事業を受注できなくさせる、こういうところに力を入れていきたいと思っております。

それで、熊本地震が起こりましたけれども、東京都も近く直下型地震が予想されております。直下型地震対策として、都民の命や財産を守るために、徹底的な震災対策をやりたいと考えております。

司会 ありがとうございます。

候補の皆さんからごらんになって左手のほうに事務局がおりまして、時間が来たら(制限時間を知らせるカードを)お出しするような形にしますので、守っていただければと思います。

では、続きまして、小池百合子さん、お願いいたします。

小池 皆様、こんにちは。

久々にこの場に座らせていただいております。前回は、自民党の総裁選に立候補したときでございます。そのときも、私、この国をしつかりと、日本を元気にするためには、私が元来持っている、育ててきた政策を、これを実行したいということで、仲間を集めて総裁選に立候補し、当時は3位の形で終わったところでございます。

今回もみずから手を挙げさせていただいて、ちょうど岐路に立っている東京、そして2020年の東京オリンピック・パラリンピックを目前にして、よりそれを契機として、ビヨンド2020も踏まえた、その新しい東京をつくっていきたい、そういう思いで手を挙げさせていただいたところでございます。

まずは、これを訴えさせていただきたいと思っております。「東京大改革」でございます。さまざま政策がございます。都政としてやらなければならないことは山積をいたしております。しかし、そこに至るまでに、まず東京の財政を透明化する。それからオリンピック・パラリンピック、予算の運営、これが本当に適正に行われているかどうかということも改めてチェック

をしなければなりません。行財政改革も進めなければなりません。一般、そして特別の予算額が13兆円に上る巨大なメガシティでございます。そういった意味で、まずこういったところから始めていかなければならない。身を切る改革を進めるという観点からは、知事報酬の削減ということも訴えております。

こういったことを進めた上で、では、一体、この東京をどのようにしていきたいのかということで、3つのシティを挙げさせていただいております。

まずは、ダイバーシティでございます。ダイバーシティ、日本は女性も男性も子どもも、障害者の方々も、そしてお年寄りも含めて、もっと生き生きと働ける、そんな場を、そして生き生きと過ごして、時には結婚をして子どもを育てるといったような、すばらしい町に変えていく、このことを進めなければなりません。

特に、私、女性政策にこれまでかかわってまいりましたが、女性政策はいつも片隅には書いてあるんですが、本気にはやれていなかったんですね。国政においてもそうでございます。そこで、目下の課題であります待機児童ゼロ。待機児童、東京で7,000人、8,000人とされておりまして、もっと多いかもかもしれません。改善されれば、またさらに働く意欲のある方々が出てくる。

そして、防災に備えるといった点では、セーフシティを訴えたいと思っております。

さらには、これからもっともっと成長していかなければならない東京という意味で、スマートシティです。

この3つのシティを中心に、きょうはご紹介をさせていただきたいと思っております。

時間でございますので、まずはここまでとさせていただきます。

司会 ありがとうございます。

では、続きまして、鳥越さん、よろしく願いいたします。

鳥越 皆さん、こんにちは。鳥越でございます。

これまでは、そちら側に座っていたんですけれども、こういう事情でこっち側に座っております、若干落ちつかない気持ちではおりますけれども、私の一言というのを述べさせていただきたいと思います。

日本なかんづく東京は何がいま一番問題なのかというと、やっぱり高度成長のころに、きょうよりはあした、あしたよりはあさって、よくなるとみんな思っていた。そういう時代はもういまはとつくになくなって、きょうよりはあした、あしたよりあさっては悪くなるんじゃないかという、未来から、将来から押し寄せてくる不安で、ほとんど皆さんが潰されそうになっております。

その象徴的に数字であらわれているのは、東京の出生率は1.17という全国最低レベルということです。これは将来が安心して迎えられないということから、子どもを産んで育てる女性が、男性が少ないという結果がこういう数字をもたらしているのだと思います。

そういうことを申しあげていく中で、私はこのがんサバイバー、自分自身ががんの経験者であるという、大腸がんのステージ4から生還した人間として、これはぜひ皆さんに知っていただきたいと思って、これを掲げます。「がん検診100%」達成です。日本人はいま、東京都民もそうですけれども、2人に1人はがんになるという時代です。そして、3人に1人はがんで亡くなる。これは将来に対する不安の中で最も大きい。いつ自分のがんに襲われるかもしれないという不安が東京都民の中にも、皆さん一人一人お抱えになっている。この問題を解決していくには、やはりがんの検診率をちょっとでも高くしていく。一人ずつ、がんの検診を受けて、早くみつけて早く処置する。

残念ながら、日本は、そして東京は、国際的に比較をしても、欧米で言えば、60%から70%のがんの受診があるんですけれども、残念ながら、日本は30%台でしかない。東京都もそういう低いレベルです。これをせめて50%、最終的には100%までがんの検診率を上げていく、こういうことを東京都として率先して取り組んでいきたい。

そして、2人に1人はがんになるんですけども、しかし、3人に1人は死なない。あしたは必ずしもそんなに不安ではないよ、というような、がんを取り巻く状況を、東京都は全国に先駆けて率先して取り組んでまいりたい、こういうふうに思っております。

司会 ありがとうございます。

では、続きまして、増田さん、よろしく願います。

増田 増田寛也です。

私の思いは、このボードに書きました。「混乱に終止符」。4年間で3人の知事が突然辞任をする。政治と金の問題など、非常に古い問題がまた起きてしまった。

一方で、東京には課題が山積をしております。リーダーが欠けた中で、本当に大きな課題の解決、これまでそうすることができなかった。一刻も早く、こうした課題の解決に努めていくことが必要だ、このように思っています。

私のもとに、「本当に東京都政は何をやっているんだ」という声がいっぱい届いておりますが、特に私に響いたのは、区市町村長さんたちが来て、そして、「おまえがこういう問題の解決に立たなければだめではないか」、こういうことを言われました。まさにそれによって、私は気持ちの切りかえ、スイッチが入りました。

まずやらなければいけないこと、1つは、子育ての問題。待機児童8,000人、実際にはこんなものではない、もっと困っている親御さんたちがいます。これを解決すること。

そして、10年以内に75歳以上のご高齢の方の数が何と50万人もふえます。こうした介護の問題を初め高齢者の問題を解決しなければいけない。施設も、そこで働く人の数も足りません。

そして3つ目は、やはり首都直下地震。来るべき30年以内に70%以内の確率で発生する。61万棟の家屋が焼失、損壊をする。きょう、あす起きるかもわからないわけです。ハードで、インフラの整備をして、これを防ぐということはできないわけで、ソフト対策でこの問題に対応していくことも大変重要であります。

こうした3つの不安の解消を行うと同時に、同時並行的に3つの成長戦略を進めていきたい。

1つは、2020年のオリンピック・パラリンピック、これはいま、出だしから少しつまずいておりますが、準備を急がなければなりません。

2つ目、観光産業を初めとして、非常に強いものがこの東京にはあります。こうした中小企業対策を初めとした産業の強化が必要でありますし、それを進めていくうえでは、そこで働く人たちの環境をよくしていく。女性の置かれている立場もよくしていく必要があります。女性の活躍という視点も大事であります。

そして最後には、2020年のエネルギーを、それ以降にどのようにつなげていくか、こうした点が必要だと思います。

ちょうど時間が参りましたので、私もこの後、続きを申しあげたいと思いますが、私は、混乱、混迷に終止符、これを、私はまずこの推進に努めていきたいと思っています。

司会 ありがとうございます。

それでは、続きまして、日本記者クラブ企画委員による代表質問に移りたいと思います。

代表質問者を紹介いたします。

候補の皆さんからごらんになって左から、川上高志さん。そして、瀬口晴義さん。この2人が代表質問者として質問させていただきます。細かいお答えをお願いすることもあるかと思いますが、ここからは原則1分でお答えいただければと思います。ご協力よろしくお願いいたします。

都政の信頼回復のための取り組み

代表質問（川上） よろしく願いいたします。

いま4人の方からビジョンをお聞きしましたが、冒頭、政治姿勢、都政への信頼回復という点からお伺いさせていただきます。

今回、約50億円のお金を使って都知事選を行うというのは、舛添前知事がこういう形でお

やめになったからです。猪瀬、舛添という2人の知事が続けておやめになったのは、これは個人的な問題だとお考えなのか、あるいは都政に何か構造的な問題があるとお考えか。問題があるとすれば、それは何か、そして、この都政への信頼回復のために、どういう取り組みをされるか。1分という時間でなかなか限られて申しわけございませんが、まずその点からお伺いしたいと思います。

1人ずつずれて、小池さんから鳥越さんという順番でお願いしたいと思います。

まず、小池さんからお願いします。

小池 ありがとうございます。

4年間で3人、そしてうち2人がお金の問題でおやめになった、任期途中で。とても異常だと思います。それぞれ個人に問題があったか。あった部分も否定はできないかもしれません。しかし、そこに構造上の問題がないのか、そのことを私はかねてより申しあげているわけでございます。

二元制の民主主義において、知事と、そして同じ都民から選ばれた都議会の議員の方々、この引っぱり合い、これはどこでもありますけれども、そこがかなり陰湿に決められてしまっているのではないだろうか。もっと情報公開をし、透明化をし、そして都民の目の前にさらすことによって、このようなバタバタ劇を繰り返さない。そのためにも、お金の問題について、ぜひ独立した委員会をつくって、そしてこのことを繰り返させないような、そんな仕組みをつくる、それも東京大改革の一丁目一番地にしていきたいと思っています。

代表質問 では鳥越さん、お願いします。

鳥越 もちろん、個人的な問題もあると思います。しかし、構造上の問題として挙げられるのは、「権力は腐敗する」という言葉があります。つまり、国民、都民、有権者の税金を使って仕事をしている権力を有している者は、東京の場合は知事ですが、必ず腐敗をする、いろんな問題を引き起こす。それをチェックしていく機能は、一つは議会であり、一つは、ここにいらっしゃるマスメディアの人たち、これが歴史

的に形成されてきた権力をチェックする役割を、使命を帯びている。

残念ながら、舛添さんの問題では、ここにいらっしゃるマスコミも含めて、最初はちゃんとチェックできなかった。それから、都議会もチェックできなかったということで、私は、今後はやはり議会とメディアがきちっと、そういう権力者の問題をチェックしていく機能を発揮しなければならないと思っています。

代表質問 では、増田さん。

増田 はい。知事がいろいろな指示をしたにもかかわらず職員がこうした問題をどういうふうに受けとめるかといえば、知事がいろいろ指示をすれば、当然、職員はそれに従うということなんですが、要は、いま大事なことは、二度もこれが繰り返されているということは、私は、知事が指示したにもかかわらず、それを食いとめるような仕組みをつくっていくことが大事であって、そのためには、まず知事サイドから詳細な日程だとか、さまざまな情報を公開していくということ、その緊張感を本人自身が持つということが大事だと私は思います。

そのうえで、こういう一連の問題、一方で、議会は対等で、知事と緊張感を持つという二元代表制の仕組みがある。議会のほうでも、こういったことについて、もっと努力をしていただく必要があると思いますが、私は、残念ながら、都庁の中で、こうしたさまざまな都民の皆さん方からのご批判をしっかりと受けとめるような仕組みが、いままででき上がっていなかったのではないかと、このような気がいたしております。

代表質問 はい、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 舛添さんの公用車の私的利用とか、それから高額出張費、これは全部都民の税金を使ってやられているんですね。だから、都民の税金を一円でも無駄遣いしないようなシステムをつくらなければいけないと思っています。

本来ならば、これは議会がチェックしなければいけない、都の職員がチェックしなければいけないんですけども、それが十分できてこなかった。こういうような問題は、私は、舛添さ

んの時代だけではなくて、石原都政の時代から続いていると思っています。

それを改善するためには、都議会職員のチェック機能を高めると同時に、まず徹底した情報公開が必要だと思っています。

それから、都民の目で都政をチェックさせるための都民評議会の設置を私は提案しております。

それから、ニューヨークなんかでは、行政から独立した公益擁護官というのを置いているんですけども、行政から独立した強力な権限を持つ行政監視オンブズマンのようなものを都の中に置いてチェックさせる、こういうシステムづくりが必要かなと思っています。

「都知事になる資格」の自己評価

代表質問 はい、ありがとうございました。では、2問目に移らせていただきます。

「究極の後出しジャンケン」という表現もございましたが、きょうも入れて、あとわずか18日間で知事を選ばなければいけません。この短期間に候補者の方々の資質を見きわめる必要があるわけですが、まず、その前提として、それぞれの方に、みずからが都知事になる資格はどこにあるのか、資格はなぜあると考えていらっしゃるのか、そして、決断された理由というものを手短かにお願いしたいと思います。

これもまた1人ずつれまして、鳥越さんからお願いします。

鳥越 私は、知事にふさわしいかどうか、それは有権者に決めてもらうものなので、なかなか自分で言うのも難しいんですけども、私は、戦後、昭和21年に小学校に入って、戦後ずっと生きてきたという、戦後をよく知っている、したがって、日本がどういうふうになって、どうなってきたことということがわかっている、東京がどうなってきたかということもわかってきている。したがって、歴史的に物をみるという目がある。それを使って、東京都政をきちっと執行していきたくというのが一つ。

それから、一回、もちろん物事を熟慮して、その後、判断をして、決断を下したら、それを実行していく力というのは、私は、これまでの経験で持っていると思っておりますので、実行力という点で、ぜひ評価していただければ幸いです。

代表質問 増田さん、お願いします

増田 私はこれまで総務大臣や岩手県の知事、そのほか行政の現場をずうっと生きてきた者です。山積する課題を解決する、その実行力というのがいま一番都政に求められているのではないかと。そして、4年間、この決めた方針をやり遂げるといふ、この責任感ですね。（前知事は）途中で残念ながら変わってしまった、これは政治と金の問題という、クリーンさに非常に問題があったと思うんですが、そうしたことも含めて、私は実行力、それから政治資金の問題、クリーンさ、そしてやり遂げる責任感、こうしたものを、われながら申しあげるのも恐縮ですけども、行政の現場で生きてきた人間として培ってきたつもりであります。

そして、そういう意味では、現場目線ということが大事で、区市町村長たちとの対話をずうっと続けてきた中で、背中を押されました。これは、一番現場で汗を流している、そういう人たちの連携を、いままで欠けていた部分を私が担っていかなければいけない、こういう覚悟をしたところであります。

代表質問 はい、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 私は、政治と金の問題の、もう一つ、なぜそういう問題が起きたかという、別の面からみると、都政というのは都民のためにあるんだ、都民の生活や暮らしを充実させるためにあるんだ、という視点が欠落していたのではないかと思っております、いずれの知事もです。

それから、都民の生活、暮らしを考える場合は、やはり都民が抱えている困り事、悩み事、そういうことをちゃんと受けとめる能力があるかどうか、これが決定的に重要だと思っております。

私は弁護士として長年、多額の借金で苦しんでいる人、あるいは貧困で苦しんでいる人の相

談に当たってきました。やはり都民の痛み、それをわかる、理解する、そしてそれに寄り添える、その能力が一番重要ではないかと思っております。

代表質問 はい、小池さん、お願いします。

小池 はい、ありがとうございます。

一言で言って、まあ、たまには女性にしたらいいんじゃないのと思っております。いま日本が抱えているさまざまな課題は、男目線のものが、はっきり言って、多いですよ。それを、目線を変えることによって、これまであった潜在力がパーッと花開くこともあるわけです。

ただ、スカートはいているからいいですよというわけではございません。環境大臣、そして防衛大臣として、例えばクールビズを、あれは予算はあまりかかっておりません、発想を変えるだけで、社会が変わりました。皆さんも変わっていますね。

ですから、そうやって、幾つもある課題は、もうわかっているんです。あと、それをどのようにして国民の皆さん、都民の皆さんと一緒にやって、引き寄せて、一緒にやりましょうといったような、そういうムーブメントを起こせるかどうかというのがまさしくリーダーであります。

一つ一つの課題は、都庁においても、それぞれその市区町村において、現場はあります。そのことに耳を傾けながら、そして優先権を決めて、実行して、都民と一緒にやっていく。任せさせていただきたいと思っております。

東京オリンピックへの基本姿勢

代表質問 ありがとうございます。

次の質問に参ります。冒頭でもそれぞれお触れになった方はいらっしゃると思いますが、東京オリンピック・パラリンピックへの対応、費用が非常に巨額に上るといふ話、それから不透明な経理の問題も指摘されております。これに対して、東京オリンピックへの基本的な考え方というもの、手短かにお願いします。

もう一人ずれて、増田さんからお願いします。

増田 はい、わかりました。

まだ東京オリンピックについては、総額どのくらい費用がかかるのか、これがはっきりしていません。この問題は早急に明らかにする、そして組織委員会と、それから国と、そして東京都と、その中でどのようにこれを負担するかということを決めていかなければなりません、そうした問題を都民の目線に立って、全体の精査をし、都民の負担を軽減するという立場に立って話を進めていかなければいけないと思います。

一方で、準備がどうも、みていますと大変おわれていますね。やらなければいけないことが山積をしていますので、大きなオリンピックを、そしてパラリンピックを感動のあるものにしていく、その実施について、多くの皆さん方に喜びをお伝えできるという、そのところも大事にしていかなければなりません。

私は都庁に入ったら、その問題について、中の費用負担ですとか、スケジュールですとかをいろいろ聞いて、早急にこの中身を明らかにして、そして強力に実行していく体制をつくっていきたいと思います。

代表質問 はい、では宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 私たちは、オリンピックについては、コンパクトでシンプルなオリンピック・パラリンピックというスローガンを掲げています。経費を最小限に抑えるべきだと思っています。すでに東京都は設備、施設整備費として 2,400 億円のお金を出しています。2,400 億円あれば、8,000 人の待機児童はすぐ解消できるんですね。そして、石原都政、猪瀬都政、新しい都営住宅は一戸もつくっていませんけれども、2 万戸近くの都営住宅がつかれるんです。そういう面で、無駄を省いて、都民の生活を充実するために使う。

それから、2 億円の裏金疑惑、これは徹底的に解明しないとだめですね。こういう不透明なところがあつたら、みんなが喜んでオリンピックを迎えられないと思っています。

それから、私は開催時期については、7 月下旬とか 8 月上旬と聞いていますけれども、一番やってはいけない時期ではないかと思っております。できれば、オリンピックとパラリンピックを同時開催ができないかな。東京オリンピックからパラリンピックが導入されましたので、パラリンピックをもっと重視すべきだと思っています。

代表質問 はい、小池さん、お願いします。

小池 当初、予算は 3,100 億円と伺っていましたが、いま話によると 6 倍に膨らんで、それを国が、それから都がどれくらい負担を分担するのか、これについては詳細をまず知らなければならぬと思います。

そして、私は日本ウエイトリフティング協会の会長を務めておりますので、オリンピックに関しては、実際にアスリートの観点からもよく承知をしているところでございます。

コンパクトと言っていたのが巨大になり、アスリートファーストと言いながら、実際には新国立競技場においても、アスリートが欲しいと言っているジムがないとか、いろいろ問題がございます。ですから、いま時系列的に、準備の段階で見直しが必要ならば見直しをする、それから何よりも意思決定までのプロセスというのを明確にしないと、都民から、心が離れてしまうということがございます。

もう一点だけ加えさせていただきますと、オリンピックでは「タバコフリー」ということを、これは世界的にやっております、この点については、都庁はかなりおけていると思いますので、とても具体的な話ですけれども、これを進めていかなければならないと思っています。

代表質問 はい、鳥越さん。

鳥越 皆さんもご存じのように、リオのオリンピックは、開催前からさまざまな治安の問題、それからジカ熱の問題、さまざまな不安がささやかれておまして、リオという都市の評価は、国際的には下がっています。

それに比べると、おそらく 2020 年の東京オリンピックは、何としてでも国際的に東京とい

うのは輝かしい、美しい都であるということをおアピールしていく絶好の機会、つまりリオとは全く正反対の大会にしたいというふうに思っております。それはできると思います。

ただ、問題は、何でも金をかければいいのかという話であります。当然、これは国民の税金、東京都民の税金を使うわけですから、一定の縮減はちゃんとしなければいけない。コンパクトでスモールな大会というものを目指すべきであるというふうに私は思っています。

代表質問 ありがとうございます。

この後、それぞれの方に個別の質問を1問ずつさせていただきたいと思っております。

まず、順番を戻りまして、宇都宮さん。前回、前々回、前回は共産党と社民党の支持を得られて出られ次点を獲得されました。今回、鳥越さんが野党の統一候補となられたわけですが、それでも立候補されるお考えに変わりはないのか。きのう鳥越さんとお会いになられて、政策をみて判断するというふうにおっしゃられたかと思うんですが、この鳥越さんの政策の評価も含めて、お願いします。

宇都宮 きのうの段階と現在の段階も、いまのところ、鳥越さんの政策はこれから作成するというので、鳥越さんの出馬に至る思いはお聞きしましたがけれども、政策については明確なものはありませんでしたので、基本的な出馬の意思は変わりません。

それから、鳥越さんを支えている野党4党の政策協定があるのかないかもちょっと不透明なんです。国政選挙では政策協定をして戦ったようではございますけれども、そういう政策が、やはり都知事選では政策論争が中心になるべきだと思っておりますので、そういうようなものがまだ明確ではありませんので、現段階では出馬の意思は変わりません。

代表質問 はい、続いて小池さん。最初の記者会見で都議会の冒頭解散ということをおっしゃいました。都議会との対立を強調されております。それと、今回、自民党の公認については推薦申請を取り下げられた。こういう形で対立が進むと、かえって都政に混乱を招くという

おそれはないのか。

それから、知事になられた場合、国政との関係というものをどのようにお考えになられていらっしゃるのでしょうか。

小池 解散云々については、もちろん議会の側から不信任を食らうという大前提であるところを指摘もしておりますが、その部分はあまり報道されていないかと思っております。

いま都議会、中でも自民党の都連、その中のトップ、これもなかなか伝わりにくいところなんです。先ほどのブラックボックスの中で決めてしまっているということについては、多くの都議会議員の方々も不満を抱いておられるんですね。

そして、今回の舛添さんの問題での混乱も、ひいてはそういったベースに、意思決定に問題があるのではないか、このように思っておりますので、まずは問題提起ということでこのように言わせていただきました。

そしてまた、一番大きなことは、協調してやっていくのはもちろんベストなんですけれども、途中から言いなりに、言うことを聞かない知事に対してのさまざまなしっぺ返しということがこれまでの混乱にもつながっているということであって、私は、協調して同じ方向を向いていけばいいけれども、それが違ったときに、そこで一体どのようにしていくのか、その問題点をまずもって提議をさせていただいたということでもあります。

代表質問 はい、ありがとうございます。

鳥越さん、きょうはちょっと触れられませんでしたけれども、きのうの記者会見をお聞きしまして、出馬の理由として、参院選の結果をみて、憲法改正が射程に入ってきたということの危機感をおっしゃいました。であれば、国政を目指すか、あるいはきのうの言葉ですと、アウトサイダーとして活動される、というのが筋ではないかなと思うんですが、都政のトップを目指されるというところとの整合性はどのように。

鳥越 きのうは、その前提のところを飛ばしましたので、誤解を招いたと思うんですけれど

も、私の都政への関心は、まず舛添さんの問題、猪瀬さんの問題、何でもこういうことが起きるのかということ。つまり、都民が汗水流して、つらい思いで、痛い思いで納めている税金を、こんなに軽々しく使うのかという、非常に不思議な感覚があって、それは何とかしなければいけないなというのが、まず都政に関心を持った第一なんです。

そして、その後に、たまたま都知事選挙の直前に参議院選挙があって、参議院選挙の開票をみていたら、戦後初めて3分の2、衆参両方で与党が3分の2、つまり憲法改正ができるという状況になった。これはこのまま放っておけない、「おまえ、男なら何とかしろ」というのを自分に問いかけまして、最終的には、絶好のチャンスだから、そういう自分が出て、都政にしっかり旗を立てたいと思ったわけです。

代表質問 最後、増田さんですが、これまで『地方消滅』、『東京消滅』という本を出されております。『地方消滅』の中では、やはり東京一極集中というものがその大きな原因であるということを指摘されておりました。この前の記者会見で、東京と地方が切磋琢磨する、という意味の発言をされておりますが、その切磋琢磨するだけの力がもう地方にはないということが原因なのではないでしょうか。この東京一極集中、いまでもどんどん再開発もされています。この問題を都政のトップとして、どう取り組まれていかれるのか。

増田 私が問題提起したのは、地方の持続可能性だけでなく、ひいてはそれが東京の持続可能性にも影響を与えますよ、ということは、日本全体の持続可能性、まさに消滅しかねないという、その危機感をかなり超長期にわたって問題提起したんです。

そういった問題提起を、アウトサイダーとしてやってきたということなんですが、いよいよ今回、こういう立場に立ちましたので、私は中に入って、本気でこの問題を解決する、ある種、問題提起した者としてのけじめとしてやらなければいけない。要は、東京と地方がどのようにお互いに共存共栄、連立できるのかということについての、さまざまなアイデアを実行して、

そして日本全体の人口を下げているのは、出生率1.17という東京ですよ。東京のこの出生率の低下、子育ての問題を本気で解決していかなければいけない、そういうある種の使命感で今回、私は立候補いたしました。

「人生の原点」について

代表質問（瀬口） では、私のほうから、ちょっと角度を変えて質問させていただきます。

皆さんは弁護士や官僚、また政治家、ジャーナリストとして、それぞれの分野で大きな実績を残していらっしゃるんですけども、そういう志を抱くに至った人生の原点というものがどこかにあるのではないかと思うんですね。そのことについて教えていただきたいと思えます。

宇都宮さんから。

宇都宮 弁護士になろうとした原点ですか。

代表質問 そうです。

宇都宮 私は、大学に入ったときは、大学の法学部に通うコースで、私の大学の法学部というのは、ほとんど当時、官僚か大企業だったんですね。ところが、私が大学に入ったときは、ちょうど日韓条約反対運動、学生運動をやっていましたけれども、だんだん社会に関心を持つようになりまして、それで部落問題研究会という文科系サークルから部落の本を借りまして、そこで、部落で生まれ育って、大変差別をされた女性の手記をみて……。

その方は、学校に通っていないから字が書けなかったんですね。それで、やっと同和教育であいうえおの字を覚えて、自分の生い立ちを書いた。いまの日本で字が書けない人がいるんだということで、私の家も貧しかったんですけども、私の両親は高等教育を受けていなくても字が書けますので、私よりもずっと貧しい人がいるということで、それで進学の方を迷ったときに、寮の先輩に「俺は弁護士を目指すんだ、弁護士は自由な仕事ができる、そしてたまには人助けができる」ということを聞きまして、自

分も弁護士を目指そうというふうになるようになりました。

代表質問 ありがとうございます。

では、小池さん、お願いします。

小池 私はいつも、鳥の目を持ち、そして虫の目でよくみて、そして全体の流れを、魚（さかな）の目で、ということ常々考えておりますけれども、キャスターもやってまいりました。そして、何よりも10代から中東、アラブに出かけて、そして異文化に触れてまいりました。そうやっていつも全体を俯瞰することによって、自分は何をしなければならぬのか、全体を俯瞰することによって、例えば東京はどうあるべきなのか、そういったことの中から、自分がなすべきことを割り出す、という傾向がございます。

キャスターをしておりました時代も、冷戦構造が崩壊をし、そしてPKOの問題も出ておりました。湾岸戦争ですね。というようなことから、ニュースを伝えるという中において、その中で、では、私は、一人は何ができるんだろうかと考えたときに、清水の舞台から飛び下りる形で、92年、参議院に飛び込んだ。

その後は、それぞれの状況において、私は何をすべきか、ミッションをいつも見出すということを中心としております。

代表質問 鳥越さん。

鳥越 私は、1965年からきょうに至るまで、報道の現場をずうっと、現場を歩いてきた人間です。しかし、大学卒業のときに新聞記者を目指したわけではなくて、大学に7年もいたものですから、ほかに入るところがなく、しょうがなく毎日新聞を受けたら、毎日新聞が採ってくれたものですから入ったというわけで、新聞記者を志していたわけではありません。

しかし、30半ばを過ぎるころから、やっぱり新聞記者という仕事は社会にとって意味のあるものだなということに気づきまして、それから本気に、これまでやってまいりました。そして半世紀、この現場を歩いてまいりました。

したがって、私の唯一の人に誇れるものは、現場を歩いてきた、管理職は一度もやっていな

いということです。現場感覚というものを、東京都政をあくまであきらめず、ぜひ生かして、実際に現場を歩いて、人々の声に耳を傾けて都政を実行していきたい、そういうふうに思っております。

代表質問 では、増田さん、お願いします。

増田 一番私のこれまでの人生に影響を与えているのは、おそらく父親の背中ではないでしょうか。寡黙な父親でしたけれども、農林省の役人をして、そのうえで政治家になりました。参議院議員になったんですけれども、ほとんど私に何かを語るということはありませんでしたが、そこから私、学び取ったといいましょうか、私は岩手の知事になりました。生まれ育ちはずうっと東京ですから、しかし、父親に連れられて岩手に行って、あ、これだけ違いがあるんだ、当時の岩手からみると、東京は本当に憧れの地ですよ。そういう中で、岩手からみると東京がどう見えるんだ、外から物事をみるということが、これだけ違うんだということ勉強しました。

そして、一方で、父親が亡くなった後、机の引き出しに、実に克明に、一軒一軒の農家のメモが全部書いてあるんですね。現場をみることの大事さ、そして、どうやったら全体の中でお互いがよくなるための関係をつくり上げていくのか、そして最後は、役人としてのやり方があるでしょうけれども、選挙の場に出て、いろいろご批判もあるでしょう、選挙に出るということは、半分は敵をつくるということですが、覚悟を持って、その場に飛び込んでいく、こんなことを学んだ気がいたします。

安倍政権に対する評価

代表質問 では、次の質問です。

増田さんは、第一次安倍政権時代の総務相になられました。小池さんは、アベノミクスを東京から発信するというふうにおっしゃっております。また鳥越さんは、参議院選で改憲勢力が3分の2を占めたことに対する、そういうことが出馬の動機とおっしゃっています。また、

宇都宮さんは、これまで安倍政権に対して厳しく批判されてきました。

そこで、安倍政権に対する評価を、憲法改正に対するご自身のお考えも含めてお聞かせ願いたいと思います。

小池さんからお願いできますか。

小池 憲法問題については、いま自民党で議論されているような流れでよろしいかと思えます。

それから2つ目、アベノミクスでございますけれども、よく言われるのは、成長戦略、第三の矢が非常に弱いということでございます。私は、この成長戦略を、より早く、より意味のある形で実現できるのは東京だというふうに思っております。そして、その成長戦略、第三の矢の中の一丁目一番地は女性が輝く社会づくりだということであるならば、私はそれを東京の場で実現していきたいと、このように思っております。

代表質問 では、鳥越さん、お願いします。

鳥越 安倍政権の評価ということですね。

代表質問 はい。

鳥越 私は、安倍政権は戦後最悪の内閣だと思っています。なぜならば、選挙のときに全く公約になかった特定秘密保護法を突然国民の反対を押し切って強行し、集団的自衛権も、国民に問うこともなく、閣議で決定し、そして安保法制も、国民の過半数が反対している中で強行採決をし、そして今度は、これは国民の賛同が、与党で3分の2あったということなんですけれども、憲法に手をつける。その中で、特に私が憂えているのは、緊急事態条項というのを自民党の憲法改正草案の中にちゃんと載っています。つまり、憲法、「重要事態が発生したときは、総理大臣は憲法を停止して、政令を別につくることができる」とはっきり書いてあります。これはかつてヒトラーがやったことです。それを日本で果たしてやっていいものでしょうか。

そういうことを、私は、安倍政権については、深く、強く思います。

代表質問 では、増田さん、お願いします。

増田 私、アベノミクスはまだ道半ば、これからもっと進めていくうえで、あの中で、私は「地方創生」ですとか「一億総活躍」、いずれも国民会議のメンバーで出てきたときに、特に働き方の改革などをきっちり行っていくことがさらに必要だというふうに思います。

非正規の問題ですとか、それから同一労働、同一賃金などについての取り組みもさらに必要だと思います。

そして、憲法の問題、それからいま問われているのは、東京都知事選挙ですね。2つあるんですが、1つは、都知事選挙と憲法の問題をそこにドッと持ち込んでくることはどうなのか、国政の問題と地方の問題とはきちんと峻別して考えていくという形が必要だと思います。

しかし、政治家として、あるいは選ばれる側の問題として、憲法認識はどうかということですから、この憲法については、もちろんいまの憲法の精神というものを十分生かす。もしそれを変えていくということであれば、改憲規定があるわけですが、そうした中で十分に議論していく必要があると思います。

代表質問 では、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 安倍政権がやってきた特別秘密保護法、これは国民の知る権利、それから報道の自由、取材の自由を侵害する憲法違反の法律だと思っています。

また、安保法制については、明確に憲法9条に違反する、憲法学者の多くもそういう指摘をしております。海外で戦争できる国づくりをやる第一歩だと思っています。

それから、今度、憲法改悪の危険性がありますけれども、自民党の憲法改正草案は、きわめて危険な9条改正をして、それから緊急事態条項、先ほど鳥越さんの指摘がありましたけれども、基本的人権を大幅に制限する内容になっています。前近代的な憲法草案だと思っています。

アベノミクスは、私は、明確にもう失敗していると思っています。安倍政権4年間で、労働者の実質賃金は下がっています。一方で、企業の内部留保は、90兆円ぐらいふえています。

アベノミクスでは、富裕層や大企業は利益を上げましたけれども、かえって国民の生活は苦しくなって、貧困と格差がさらに広がっていると思っております。

東京都政は、アベノミクスのそういう国民生活を破壊するような政策から、都民の生活を守る防波堤にしなければならないと思っております。

原発を含むエネルギー政策について

代表質問 はい、ありがとうございます。

では、次の質問です。東京は、最大の電力の消費地であります。原発の問題は立地県だけの問題ではないと思うんですね。そこで、東京都のエネルギー政策について、これは原発の再稼働の是非も含めて、お考えをお聞かせください。

では、鳥越さんからお願いします。

鳥越 基本的には、私は、2011年の3.11を経験した人間として、原発は人間の手に負えないものだという認識を持っております。一回被災し、災害が起きた場合は、全くコントロールできないもので、これはチェルノブイリだけではありません。福島第一原子力発電所も同じです。

したがって、できる限り早く原発依存をやめていくという時代に入りたいと思います。先日、私は北欧に旅行して視察をしてきましたけれども、デンマーク、コペンハーゲンでは、港に風力発電の風車も林立していました。これをみて、ああ、北欧というのは原発に頼らない、そういうふうにはエネルギーの源を変えたんだなと思いました。日本もそういう時代を切り開いていくべきだ、そういう思いを新たにしておいて北欧から帰ってきました。

代表質問 増田さん、お願いします。

増田 3.11を経験して、この原発の被災状況は大変深刻なものだと。私は先月でしょうか、また福島第一に行ってみてきましたけれども、しかし、これを復旧するには、これから何十年かかるかわからない。したがって、原発依存度

を低減していくというのは、これはもう国として全力を挙げてやっていく必要がある。

こういう大きな国のエネルギー政策を進めていくと同時に、都知事にもし皆さん方のお力でならさせていただければ、都民のエネルギー、電力などのエネルギーをどう守っていくのか、都民の生活を守るうえで、この点も非常に重要です。いますぐに自然エネルギーに切りかえて、エネルギー供給を確保するというわけにはいかない。したがって、これをいま直ちに切りかえるというわけにはいなくて、安全性が確認された原発を動かすという政策はいま認めていくべきだと思いますが、将来的に原発依存度をもっとより低減していく、これは当然進めていくべきですし、知事としても、そういう都民のエネルギーを確保していく中で、どうやって今度は自然エネルギーの利活用を進めていくのか、この観点も非常に大事だと思っております。

代表質問 では、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 私が日弁連会長をしていたときに、東日本大震災と原発事故が発生しました。日弁連は直ちに対策本部をつくって、被災者と、原発事故の被害者の救済に当たりました。

地震大国、今回も熊本地震が起きましたけれども、そういう地震大国に54基もの原発をつくったというのは、これは大変な誤りだったと思います。私は、原発の再稼働、あるいは輸出に反対をします。

それから、当然、東京は福島原発の発電した電力の最大消費地だったので、この原発の避難者、福島からの避難者を最大限支援する責任があると思っております。

原発にかえて、自然再生エネルギーによる発電を促進すべきだと思っております。三多摩地域、八王子などでは、市民グループが自然再生エネルギーをつくる会社などを興しています。こういうところは都は支援をすると同時に、都独自の自然再生エネルギーの開発を全力を挙げてやるべきだろうと思っております。

代表質問 では、小池さん、お願いします。

小池 私は、むしろこれを機に、環境先進都

市東京を強力に進めていきたいと思っております。自然再生エネルギー、これは大きなメガソーラーといったような形ではなく、個々の家庭でやっていくだけでも随分違います。わが家は完全なエコハウス、すでにモデルとしてつくっております。

そして、意外と気がつかないところは、発電をするということだけでなく、省エネをする、これはとても大きいところであります。全ての照明器具を日本中でLED化いたしますと、エネ研の調査によりますと、13基の原発に匹敵をするということでございます。ですから、身近なところで、都民一人一人にご協力いただくというメッセージを発するというのも一つ。

それから、エネルギーの問題点は蓄電です。蓄電をどのようにして可能なものにしていくのかということ、これは技術革新も含めてやっていく。それから、車も、水素自動車、電気自動車、バイオで走る車もございます。そういったところから、細かく、そして大胆にエネルギーの確保、それもクリーンエネルギーの確保に進めると思います。

原発については、安全性の確保は第一、これを申しあげておきたいと思っております。

大地震に備える首都の防災対策は

代表質問 ありがとうございます。

では、最後の質問です。首都圏のマグニチュード7クラスの地震はいつ起きてもおかしくない、ということが言われています。首都の防災対策について、それぞれ簡潔にお答えいただきたいと思っております。

では、増田さんからお願いします。

増田 まだまだ木造密集住宅ですとか、そういった危険な地域がございます。したがって、インフラをきちんと整備するということが大事なんです、一方で、そういうところで火が出て亡くなる方が大変心配され、最悪の場合には、冬の夕方6時に2万3,000の方が亡くなるかもしれない。ですから、感震ブレーカ

ーといったような、揺れがあったときにスパッと電源が落ちるようなものをもっと普及して、対策を講じていく、そういったきめ細かな対策も必要ですし、一時的な帰宅困難者の方々をどこかに収容するような、ホテルのロビーですとか、民間のビルのロビーなどを開放していただくような取り組み、企業のいわゆるBCPといいますが、事業継続計画、随分つくっていただいておりますが、そうしたものをもっと進めていくことが必要だろうと思っております。

この首都直下地震については、私は、中央防災会議の、そちらのほうの責任者をやっていたんですが、まだまだいろいろなことで残されているところがあるんですね。ですから、自分の身は自分で守るという意識に皆さん方がどこまでなっていたりするのか、そういう危機意識を持っていただけるような都としての取り組みを丁寧に行っていく必要があると思っております。

代表質問 では、宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 いまの東京都は、防災対策はきわめておこなわれていると思っております。都は、大きな道路を整備することによって延焼を防ぐようなことはやっていますけれども、個人の家に対する耐震化とか不燃化、木密地域ですね、こういう補助金、助成金をやめているんですね。静岡などはそれを出しているわけです。やはり都民の財産や命を守るために、そういう助成金を出す。それから、感震ブレーカーをつける場合はそういう補助金を出す、こういうことを徹底してやるべきだろうと思っております。

それから、帰宅困難者の問題は、私が日弁連会長のときは、17階建ての会館を市民に開放して、避難所として提供したんです。こういう民間の施設等とも連携して、そういう情報を常に都民に提供するようにすべきだろうと思っております。

それから、あと一つ欠落しているのは、東京湾の耐震化とか、震災対策が極めておこなわれているんです。東京湾には5,000個ぐらいのタンクがあります。これが東日本大震災で流れ出して、火災になって、大変な事態になったんですけれ

ども、その辺は徹底的にやるべきだろうと思っています。

代表質問 では、小池さん、お願いします。

小池 舛添さんが残されたいい仕事の一つは、「東京防災」という本、あれを残されたことはよかったと思います。そして、私自身、阪神大震災の経験者でもございますので、木密地域の防災対策というのは早急にやらなければならない。そして、地震国だから日本は電柱が多いと思っておられるかもしれないが、逆です。むしろ倒れることによって、消防車や自衛隊の車、一番ひどいところには行けないということから、私は無電柱化ということをやろうとお訴えをしているところでございます。

それから、元防衛大臣としても申しあげますけれども、あの阪神大震災のときも東日本のときも、今回の熊本もそうなんですが、まちが壊滅状態になったようなときは、やはりヘリコプターというのはとても有効なんです。だったら、ヘリコプターが確実におりられるというところ、それから、まちの中にもおりられるような機種を選ぶということで、ここは自衛隊、防衛省と連携すべきだと思っています。

最後に、サイバーテロでございますけれども、みえないだけに、これは本当に真剣に準備しておかなければ、オリンピック・パラリンピックの安全性も守られない。ここは内外の情報をうまく連携しながら対応していくということが必要だと思っています。

代表質問 では、鳥越さん、お願いします。

鳥越 直下型地震に対する防災対策としては、大きく分けて2つあると思うんですね。

1つは、東京都ができること、これは東京の都市としての構造を防災という点から改善していく、これは大変な投資が必要です。だから、そう簡単にはできることではありませんけれども、東京としては、やはり一つずつ家屋の構造から、道路から、湾岸の問題から、全部やっつけていかなければならない。

もう一つは、意外に忘れられているのは、個人の防災なんですね。一人一人が防災意識をどれだけ持つか。これは東京都が呼びかけてやれ

ばできる。私は、枕元には防災グッズを入れたかばんを置いてあります。それから、靴も置いてあります。ズボンも置いてあります。そして、何か起きたときは、家族がばらばらに住んでいますので、どうやってお互いに連絡をとるか、携帯は通じなくなります、そうしたときにどうしたらいいかというのは、私は九州に妹がおりますので、妹の場所に公衆電話でかけて、公衆電話はおそらく通じると思いますから、公衆電話をかけて、九州を中継地にして、お互いに連絡を取り合うというようなことを日ごろから心がけております。

そういう日ごろから個人の防災意識の心がけというものを、都民の皆さんにぜひ呼びかけていきたいなと思っています。

代表質問 ありがとうございます。それでは、これで代表質問を終わります。小栗さんにマイクをお返しします。

候補予定者同士の質疑応答

司会 ありがとうございます。

これまでさまざまな論点で伺ってまいりましたが、告示はあすということで、より候補者の皆さんの違いを知るために、ここで当初の予定とは少し違いますけれども、候補者の皆さん同士で質問を投げかけ合っていただければと思います。どなたか1人を指名して、1分で質問していただき、指名された方も1分でお答えいただくという形をお願いします。

それでは、ここは順番を逆にいたしまして、増田さんからお願いできますでしょうか。

増田 それでは、小池先生にご質問申しあげたいと思います。

どうしても私も気になりますのは、都議会の冒頭解散ということで、先ほどもお答えがあったんですが、都議会だとか、そのボスがそこをいろいろ支配している、あるいは意思決定が変わらないというのは、先生がおっしゃっているのは会派の中とか、都連という組織の中のことに私にはみえて、都議会冒頭解散と

というのは、各党派がいろいろあります。そういった都民の代表として選ばれている都議会、一方で知事も代表として選ばれている、いわゆる二元代表制という中で、いきなり解散、あるいはそういう形で議論を提起していくと、ただでさえ遅れている課題がずっと遅れてしまって、私は「混乱に終止符」と言いましたけれども、そうしたことが全て滞ってしまう。停滞と、そして混乱がさらに継続してしまう。また、40～50億でしょうか、予算を使って選挙しなければならぬということなのです。

私は、まず冒頭、きちんとした議会との対話というか、緊張感のある議論を議場を中心にやっていくべきではないかと思いますが、いかがでしょうか。

小池 はい、ありがとうございます。

都知事の選挙において、議会との関係というのがこれほどクローズアップされたことはなかったのではないかと思います。その意味では、言葉足らずの部分があったかもしれませんが、冒頭解散というのは大変なショックなスタートになったかと思えます。

もちろん、大前提として不信任をこちらがいただいて、ということをお願いしたわけでございまして、ルールを知らないわけではございません。しかし、私自身が東京都連の一員になりましてから、さまざまな決定ということが、結果的に知らされる。そしてまた、私、会長代理なんですけれども、重要な会議には呼ばれないといったようなことがしばしばございまして、後で「そうなの」と聞かされたりすることもございます。ですから、デュープロセスが明確でないということは何度も私、申しあげているところでございます。

そことけんかしてどうするんだという話で、確かにそうでございますけれども、しかし、これまでも猪瀬、舛添で続いてきたことは、次、何かのきっかけで起こる可能性は十分にあるということから、もう一度ここに的を当てて考えなければ、同じことをむしろ繰り返すのではないだろうか、ということをお願いしているわけでございます。

なかなかわかりにくい部分もあろうかと思いますが、何年か、この都連の一員に加えていただいて、そして、ほかの、声を上げないけれども同様な感覚を持っている議員はたくさんいるということも申し添えておきます。

司会 お答えは1分でまとめていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、鳥越さん、どなたかをご指名いただけますでしょうか。

鳥越 誰を指名していいか本当に困るんですけれども、1つだけちょっと気になっていることがあって、これは増田さんにお聞きしたいんですけれども、増田さんがたしか総務大臣をされているときの措置だと思いますけれども、東京都の財源、たしか4,000億円ですか、国に吸い上げて、それを地方に交付するというようなことをおやりになったというふうに私は理解しているんですけれども、事実でなかったら、私の間違いですが、もしそうだとするならば、これは東京都の一極集中ということに対する措置だというふうに思いますので、意味はあるかと思えますけれども、税金を納めている東京都民の立場からすると、果たしてそれでいいのかという問題もあるかと思えます。増田さんがもし都知事になられた場合、東京都の財源を地方に交付していくというような仕組みは、是認されるのかどうか、ちょっとお聞きしたいです。

増田 はい、ありがとうございます。

私が総務大臣のとき、ちょうど平成19年から20年のときに、東京と地方の税源の偏在、非常に税の格差が広がりました。したがって、当時の緊急措置として、法人事業税、これは都道府県税なんです、都税の法人事業税を国税化して、交付税原資化する、こういう緊急措置を行いました。これは当時、東京都とよく話し合いをして、苦渋の選択のような形で、ご理解いただいたんですが、臨時的な緊急措置ということで、これをもう解消して、もとに戻すというような形に変わっているわけです。

私は、当時の緊急措置は緊急措置として、これは消費税引き上げのときに解消するというようになったわけですが、大事なものは東京のこ

れからの財政需要、オリンピック・パラリンピックもありますし、介護だとか子育てとか、膨大な財政需要が出てきますので、東京都民のための税源は、きちんとしっかりと守るということが必要である。当時の緊急措置とは別に、これから都民の税金をしっかりと守って、そうした財政需要に充てていく、こういうことが必要だと思えます。

司会 それでは、続きまして、小池さん、どなたかをご指名、お願いいたします。

小池 それでは、せっかく増田さんから先ほどご質問をいただきましたので、増田さんをご指名させていただきます。

前回の舛添さんの都知事選のときに、党内で、まさしく都連で舛添さんは世論調査で大変高い支持率があるということで舛添さんというお話がありました。その中でも、除名された方を連れてきてどうするんだ、そのような議論もあったのを覚えております。それでも人気が高いからということで、舛添さんに決まった。現役の国会議員は、その後でまた補欠選挙が行われるからだめだ、ということでお話がありました。

今回であります、私も真っ先に手を挙げさせていただいたわけでごさいます、除名されていない現役の議員として手を挙げたところが、結局、最終的にいろいろとあって、増田さんとなったわけでありまして、増田さんは、どうして私じゃなかったとお考えになるでしょうか。

増田 私は、小池先生と、一月、二月ぐらい前ですか、少子化、それから婚活・街コンなど、一緒にそのイベントなどにも出ていきました、議員連盟にも出ていきましたし、大変尊敬申しあげる方です。

ですから、党側の事情は、私は十分に承知をしているわけではありませんが、やはり口幅つたい言い方でありまして、私が出るということをお願いしたのは、区市町村長との対話を積み上げて、そのうえで、いまのさまざまな課題山積している都政を円滑に遂行していこうということを申しあげたので、各党、各

組織に広く支援を呼びかけるような形でこれから進めていこうと思っております。

繰り返しになりますが、自民党の中の問題というのは十分に承知しておりませんし、先ほど小池先生がおっしゃった冒頭解散というのは、実は共産党とか、生活に根差した党なども全部議員の職を奪ってしまうので、繰り返しになりますけれども、やはり小池先生のやられていることは、少し劇場型のような、大変お叱りいただくかもしれませんが、そういうことをやられようとしているところが、私からも少し感じられるような気がして、そういったところがいろいろ皆さん方の判断につながっているのかな——済みません。大変失礼なことを申しあげまして、申しわけございません。

小池 ただ、区市町村のいろんなイベントは都連が準備したものですよ。それだけ一つ申しあげます。

司会 後ほどまた発言の機会をお渡ししますので、そこで反論いただければと思います。

それでは、宇都宮さんからお願いいたします。

宇都宮 2代続けて任期途中で辞職した猪瀬さん、舛添さん、これはいずれも政治と金の問題ですけど、これは自民党・公明党が推薦した知事ですよ。だから、そういう問題については自民党・公明党の責任は極めて重大である。さらには都議会も与党は自民党・公明党が多数を持っているわけですから、チェック機能を十分果たし得なかった。

この点について、増田さんは自民党員ではないのかもしれませんが、今回、自民党・公明党から推されている。さらには過去の猪瀬さん、舛添さんが辞められた、その候補を推した自民党・公明党の責任をどう考えられているか。それから、小池さんも自民党員であったし、かつ、都連のほうでは何となく重要なことは聞かされてなかったということですから、やはり責任が……。

司会 お一人に質問していただきたいのですが。

宇都宮 だから、その点について、自民党と公明党の責任について、どうお考えなのか。

司会 お相手は増田さん……

宇都宮 ……と小池さん。

司会 お一人にさせていただきたいんですが。

宇都宮 あ、一人。では、小池さん。

小池 猪瀬さんの問題、かなりこれは個人的な部分もあったと思いますけれども、舛添さんについては、先ほど申しあげたように、人気投票でやってしまって、最終的に都連でお決めになった、都連の上のほうで決められたということについては、多くの議員もおかしいと、そういう思いは持っておりました。ご指摘は甘んじて受けなければなりませんけれども、いずれにしても、選考過程ということについても、なかなか問題が山積している、このように思っております。

司会 はい、ありがとうございます。

反論し足りない部分などおありかと思えますけれども、最後に、全員の皆さんにまた発言の機会をとっておりますので、そこでお話いただければと思います。

それでは続きまして、都庁担当の記者を代表いたしまして、岩村さん、質問をよろしく願います。

待機児童解消への具体的解決策は

岩村 都庁記者クラブの幹事社をしております日経新聞の岩村と申します。きょうはよろしく願います。全員の方にお伺いさせていただきます。

都政の課題について、まず一点。東京都の待機児童数は約8,000人とも言われて、全国からみても突出しております。待機児童の解消というのは、都政において喫緊の課題の一つではありますが、なかなか決め手がないという難しさもございます。

そこで、各候補の皆様方に、その具体的な解決策について、現時点でどのような考えをお持ちでいらっしゃるのか、そのあたりをお伺いしたいと思います。

司会 はい、それでは、始めに戻りまして、

宇都宮さんから順番に、1分以内でお答えいただければと思います。宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 まず、待機児童解消のための予算措置をきっちりするという事ですね。それから、保育園をつくるというのは、区市町村に権限があるわけですが、それを支援する都としては、例えば公有地を提供するとか、都が予算措置を講じて、購入した土地を区市町村の保育園づくりに貸し出すとか、そういうことを徹底してやる必要があるんじゃないかと思っております。

司会 続いて小池さん、お願いいたします。

小池 まず、ここは同じなんですけれども、やはり保育士の改善、待遇改善というのは、これは喫緊の課題であろうと思えます。箱物については、さまざまな規制が、ある意味であり過ぎる部分もございます。安全性を確保というのは十分考えねばなりませんけれども、さまざまな制限、広さ制限などですね、これも考慮すべきである。

それから、ゼロ歳児から2歳児、そして3歳児以上ということで、この年齢制限についてももう一度見直しをすべきではないか、このように思っております。

で、箱物ということと言いますと、問題になっております市ヶ谷の公有地ですね、それを韓国人の学校に貸し出すという舛添さんの説明されてきたことなどは、むしろ、これをきっかけに、保育施設であり高齢者の施設であるということ、両方コンバインしたような形で進めていくということは、なかなか国においては、高齢者と子どもは、文科省と厚労省の境がありますけれども、都はそういった2つの、ハイブリッドな形のようなもの、公有地を有効に活用するという事を申しあげました。

司会 鳥越さん、お願いします。

鳥越 待機児童の問題は、2つの側面がありまして、いま小池さんもおっしゃったように、一つは、施設の問題、それからもう一つは、その施設を運営していく保育士等々のスタッフの問題、両方の、人と物という2つの側面があ

るわけです。これは、どちらもこれだけ緊急性が叫ばれながら、なかなか解決しないというのは、もちろん東京都政の執行者がそれだけさぼってきたということでもあるわけですが、背景にはやはり莫大な予算がかかる、金がかかるので、ちょっとなかなか手をつけられないという問題がきつとあるんだろうと私は推測します。

では、どうするのかということですが、これはもう、東京都は比較的ほかの県に比べたら裕福な自治体であります。したがって、何とか工面すればできるかもしれませんが、私は、まず都知事になってやるべきことは、予算の見直しだろうと思うんですね。やっぱり予算を見直して、将来の不安をなくしていく、少子高齢化にちゃんと手を打っていくというところにやっぱり金をかける。そのほかの、例えば公共事業なんかでは、そんなに喫緊の問題でなければ多少後回しにしてでも予算を組みかえていく。そういうことが必要なんだろうというふうに思います。

司会 増田さん、お願いします。

増田 待機児童の問題は、これはほとんど区市町村の仕事が多いんですね。ただ、それを、そこに任せるのではなくて、都がもっとバックアップをしていく。これがまず必要で、予算ももっとふやしていく必要があると思います。

その保育所で働く人の問題、非常に所得が抑えられていて、また過剰労働である。例えば、私、きめ細かくみていけばまだまだ知恵を出せると思うんですね。土曜日は利用のニーズが下がるんですが、あけておくために保育士さんを配置していますが、いま共同で土曜日は開園するということが特例で認められていますので、これをもっと活用して、保育士さんに休んでいただくといったようなことも必要だし、それから広域保育という、幼稚園は前、バスで認められていましたが、保育園もいまバス送迎が認められました。まだまだいろいろな知恵が出せると思います。

そして、あと箱物の問題なんですけど、用地がないのでやむを得ず公園につくろうかとか、

あるいは閑静な住宅地の中につくろうかということがあるんですが、これも当事者あるいは事業者だけに任せるのではなくて、住民との間の丁寧な話し合いをする、都としてのそのようなチームをつくって、しっかり現場に入っていて合意形成に努力していくということが必要だろうと思います。誰しも将来の子どもさんたちがかわいいのは決まっているわけですから、もっともっと都も汗かく必要があると思います。

ポスト五輪の東京像について

岩村 ありがとうございます。

あともう一問お願いします。これはやや中期的な質問なんですけれども、先ほど、東京五輪パラリンピックについては皆様にご回答いただきましたけれども、ポスト五輪についてお伺いしたいと思います。

いま行政あるいは企業においても、2020年を一つの目標として定めて、それに向かって動いておりますけれども、東京五輪が終わると、その後、メガイベントの予定も特になく、一方で高齢化というのはどんどん進行していくという事態になります。景気の悪化というのも懸念されておりますけれども、五輪後の都市像、ポスト五輪の東京像というのをどのように描いていくべきか、あるいはどのような都市を目指すべきなのか、そのあたりをまた全員の方にお伺いしたいと思います。

司会 それでは、今度はまた逆にいたしまして、増田さんから順にお答えをお願いいたします。

増田 ポスト五輪、2020年以降、オリンピック・パラリンピックのエネルギーをそこにどこまで注ぎ込めることができるかということですが、私が地域のいわゆる持続可能性を問うたように、そこでは都は大変大きな問題を抱えています。

で、一方で産業も強化しなければならないとか、それから環境都市に切りかえていかなければいけないということがあるので、2020年以

降の大きなグランドデザイン、長期計画もいまから10年後までですので、もっと超長期をにらんだグランドデザインで東京を考えていく必要があると思うんです。まずは、世界の中で輝く東京をつくっていく、その東京というのは、各国との首都同士の都市間競争に勝てるぐらいの、そういう東京にしていく必要があると思います。その東京が、地方をしっかりと共存共栄、連携をするような東京に切りかえていく。これが、私が問題提起をした、いわゆる消滅可能性の一番、地方の活力を吸い取るようないままでの東京のやり方を切りかえるということです。この点をきちんと都民の皆様方と議論して、そのうえでグランドデザインにつなげていきたいと思います。

司会 鳥越さんお願いします。

鳥越 2020年が終わった後、日本はどうなるのかというのは、おそらく皆さんもあまり考えていらっしゃらないと思います。実はここには、少子高齢化という大変な危機がじわじわと忍び寄ってきて、2020年を過ぎれば、どっと団塊の世代がおそらく2025年ぐらいには80歳を迎えて、いわゆる介護世代を迎えますので、いわゆる大介護という時代になってまいります。

そういうことを考えますと、従来の経済の考え方、つまり車だとか家電製品とか、そういうものを売って経済を活性化するという、そういう経済の考え方ではなくて、おそらくポスト五輪では、日本が必要としているもの、それは介護だったり、少子化の問題であったり、福祉の問題だったりする、そういうところにちゃんとお金を回して、そのことによって需要を消費に変えて、そして経済を回していく。そういう経済循環の構造を変えない限り、おそらくいまのままでは誰も物は買わない、経済はよくなりません、個人消費は全然ふえない、一方で少子高齢化はどんどん進んでいくという事態は変わらないと思います。

司会 小池さん、お願いします。

小池 ちょっとオリンピックにこだわってお話しさせていただきますと、2020年、前回

の東京オリンピック以来、久しぶりの2度目のオリンピックであります、もう一つパラリンピックがあるというのは、ここは重要だと思います。そして、ギリシャなどホスト国では、その後、オリンピックの建物などがもう破綻をして、吹きっさらしの中にあるというのではなくて、むしろパラリンピックを有効に活用することは、将来の日本の高齢化であったり、それから障害者にも優しいという観点から、このパラリンピックをよく活用していくことだというふうに思っております。それによって、ユニバーサル化をしていくということです。

私、公約の一つに、「満員電車ゼロへ」ということを申しあげているんですが、満員電車というのはごく当たり前のものだと思っておられるというか、みんな我慢してね。だけど、人口が減ると、この満員電車がなくなってしまうんですが、しかしながら、そういう受け身ではなくて、より住みやすい、満員電車にならないような、技術的な、信号の機能をアップするとか、いろいろあるんですけども、それによって東京の魅力をいつまでも持ち続ける。

そして、国際金融都市アジア No.1 といったような、そういった引きつける方法を考えて、やはり人口は全てのもとになると思いますので、東京で人口が減る、ただただ減っていくことだけは阻止したいと思います。

司会 宇都宮さん、お願いします。

宇都宮 最近の経済学者の分析だと、あまりオリンピックでは経済効果がないんじゃないかという分析をされている方もいますし、それから、長野オリンピックもそうですけれども、オリンピックが終わった後、大変な負債を抱えてしまいますよね。こういうことが実は県民の生活を圧迫する、都民の生活を圧迫するのは、これは大問題であって、先ほどお話ししましたように、できるだけ簡素、シンプルなオリンピックにして、浮いた財源は都民の生活を支えていく、働いている人の賃金を底上げして、そして社会保障を充実させる。

実は、日本のGDPの6割は個人消費なので、安倍政権のアベノミクスがうまくいっていな

いというのはそのところだと思うんですね。それを東京都が、やはり都民の生活、暮らしを支援していく、そういう政策が必要だと思っています。

ちなみに、新国立競技場の問題は、私、前回の知事選のときは、既製の施設をそのまま使うべきだ、収容人員が足りない分は、仮設のいすを使うべきだという提案をしたんですけども、ああいう大規模工事をやって、すでに巨額なお金が使われている。これは非常に問題であるなあと、いまのようなオリンピックというのは大都市でしか開催できない。オリンピックそのものの考え方を変えるべきだと思います。

司会 はい、ありがとうございました。

終了の時間が迫ってまいりましたけれども、何とか会場から質問を受け付けたいと思います。質問のある方は挙手をしてください。私が指名させていただきますので、近くのマイクを使って、所属と名前を名乗った後、どなたへの質問かということをはっきりと明かにして、簡潔に質問していただければと思います。質問はお一人1問でお願いいたします。

それでは、あちらの女性の方、ベージュの、いま後ろを振り返った方、お願いします。近くのマイクでお願いいたします。所属とお名前を名乗って、どなたへの質問かをはっきりとお願いたします

質問(テレビ東京) よろしく申し上げます。

皆さんに1問ずつお伺いしたいんですが、都民の方々から皆さんに対して何を聞きたいかというのを取材してきているんですけども、まず宇都宮さんに関しては、今回は、これまでと違って政党の支持がない、非常に厳しい戦いになると思いますが、どうやって戦い抜くという気持ちがありますか、ということです。

司会 ごめんなさい、皆さんに1問ずつということでしょうか。

質問 はい。

司会 お一方を指名して1問ということをお願いいたします。

質問 一人に対して1問。

そうしましたら、鳥越さん、よろしいでしょうか。済みません。本当は皆さんにお一人ずつ1問ずつぶつけたかったんですけども。

司会 済みません、多くの方に質問の機会を、ということで、恐縮です。

質問 きこのうの会見をみた都民の方から、詳細の政策について、まだこれから勉強します、これから詳しくみていきたいという状況で、そういった状況の中で立候補をされるということがどうなのか、心配だという声がありました。それに関してはいかがでしょうか。

鳥越 誰でも最初はわからないんですよ。だけど、ちゃんと真剣に取り組んでいけば、おのずと道は開けてくる、僕はそう思っています。

で、もう昨日から今日にかけて、私は自分なりの政策は、公約はつくりました。宇都宮さんは聞いてないと言っているんだけど、僕は言っているつもりなんです、テレビとか、こういう討論の場で、できるだけ具体的に言っているつもりなので。それは一つの文章に、紙切れにまとめてないだけで、できるだけ言っているつもりなんです。そんなに心配をしていただかなくても結構です。ちゃんとやっています。大丈夫です。

司会 ありがとうございます。ごめんなさい、多くの方に質問を、ということでご協力をお願いいたします。

それでは、そちらの男性の方、お願いします。

質問(TBS)

増田さんに質問です。政治家と金の問題について、もう少し具体的にお聞きしたいんですが、市民の、都民の批判を受けとめる仕組みが足りないとおっしゃっていらっしゃいました。恐縮ながら、増田さん、岩手時代にファーストクラスを利用されたということもありまして、その反省点なども踏まえて、今度、都知事になったらどういうふうに分の金の使い道、そして都議会の金の使い道、例えば領収書のネット公開ですとか、具体的に考えていることがあれば教えてください。

増田 はい、ありがとうございます。

岩手県の知事時代にファーストクラスを利用しておりました。いまの最近の航空機事情というんでしょうか、それをみておりますと、ビジネスクラスでも全部、横になれるような座席がありますよね。私、当時、利用していたときも、全部ファーストクラスでもそういう形にならずに、こういう斜めぐらいの座席だったと思います。

で、常にどういう利用方法をしているかということ公開して、私はいまの時代に、これだけシートの状況がよくなってきていますので、基本的にはそういう公職にある人たちも全部ビジネスクラスで対応できるのではないかと私は思います。私自身はもちろんビジネスクラスで利用するということになります。もちろん当選させていただければの話ですが。

事ほどさように、ある事柄について、それは税金の使い方としていかがかなということ、まず都民の皆さん方がわかる仕組みがないと、それに対して一体どういう見方があるのかなというのはわかりませんね。舩添さんが(海外に)行かれたときも、通訳料だとか、いろんな単価が高いとかいうのは、細かなことを出してそういうことがわかってきたので、私は、どういう仕組みになっているかはありますけれども、まず都庁に行って、知事や知事周り、あるいは職員のところはどういうふうに情報公開しているのか、できるだけそういった仕組みをきちんとつくっていく必要があると思います。

司会 ありがとうございます。

残念ながら、時間を過ぎてしまいましたので、これで会場の皆さんからの質問をおしまいとさせていただきます。

それでは、最後にお一人ずつ、締めくくりの発言をお願いしたいと思います。先ほど控室のほうで揮毫をしていただきましたので、それを示しながら、それと絡める形で、1分ほどお話をいただければと思います。

それでは、宇都宮さんからお願いできますでしょうか。

宇都宮 先ほどもお話ししましたがけれども、地方自治体の最大の役割は、その地方自治体に

住んでいる住民の福祉の増進なんですね。これが東京都で十分やられてこなかった。これは私は、石原都政の時代から福祉の削減、生活そのものを厳しくしてきたと思っています。これをちゃんとやるということが非常に都政として重要な役割じゃないかなと思っています。

都には、大変裕福な使える財源があります。3兆数千億円の貯金があります。そのうちの1兆円というのは、かなり福祉に回せるお金なんですね。こういうお金なんかも有効に使いながら、待機児童の解消、それから特養ホームの建設、それから小中学校の給食の無償化、高校の授業料の完全無償化、大学の授業料の半額化等を実現してまいりたいと思っています。

司会 小池さんお願いいたします。

小池 「希望のまち東京」とさせていただきました。いま日本に足りないもの、そして東京に足りないものは希望だと思います。多くの子ども食堂に来ている子どもたちが、ひよっとしたら絶望の中にいるかもしれない。私は数々の具体的な政策をお示しすることによって、あ、こんな希望があるんだ、あ、こんなことできるんだ、というふうに都民の皆さんが感じていただけるような、そんな政策をどんどんと皆さんに出していきたいと思っています。それは生活者目線であり、都民目線でございます。ぜひそんな仕事をさせていただきたいということから、「希望のまち」とさせていただきました。前回アラビア語で書いたら、大変不評だったので、今回は日本語で。

司会 鳥越さん、お願いいたします。

鳥越 ちょっと字が下手で申しわけないですけれども。

「何せうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂へ」。これは中世の閑吟集の中に出てくる一句です。これを私みつけたときに、あ、これだなと思いました。この意味は、「くすんで」というのは地味に何もしないでくすんで生きていてどうするんだい、人生は夢のようにあつという間だよ。だから、いま、やりたいことを狂うほどにやれよ、という意味だとも私は解釈しております。まさにいま私はこの心境です。私の

人生はあと 10 年残っているかどうかだと思います。がんもやりましたし、そんなに長生きできるとは思っていないですが、まあ、もし自分に生命が、命があるならば、その残りの限りを尽くして、ただ狂ったかのように精根込めて、全身全霊をかけて東京都知事をやりたい、やらせてください、そういう思いです。

司会 増田さん、お願いいたします。

増田 前回、こちらにお邪魔したときは、「大志」と書いたと思います。今回は「覚悟」。多くの皆さん方の声を、そして区市町村長さんたちの声、私も覚悟を決めた、スイッチが入ったといいましょうか、いまの都政の混乱をおさめるために立ち上がらなければいけない、このように思いました。

こうした都政を進めていくのは、それにしても肩に力を入れて、知事一人が何かやっていくということではなくて、都庁でも 16 万人、区職員としても 6 万人はいらっしやいます。あと、市町村と、多くの人たちと一緒にこれを進めていかなければいけない。そして、全体の組織のガバナンスのようなことをきちんとやっていかなければいけない。全てが、やはり知事がどういう覚悟と、どういう姿勢で振る舞っ

ているのか、舛添さんのような——固有名詞を挙げて大変恐縮ですが——ああいう形だと職員は絶対ついていけない。私はみずからをきちんと律する、そういう覚悟と同時に、1,350 万人の都民の皆さん方の、まさに命と生活をお預かりする、そういう覚悟でこの都知事の職に立候補しました。ぜひ、私も都知事として、その使命を遂げたいと、このように思います。ありがとうございました。

司会 はい、それでは、こちらの都合で恐縮なんですが、皆さん、いまの揮毫を前のほうに掲げていただいて、撮影させていただく機会にご協力いただければと思います。

大丈夫でしょうか。

はい、ありがとうございました。

それでは、十分にお伺いできなかった問題もあるかと思いますが、予定の時間を過ぎましたので、共同記者会見、これでお開きとさせていただきますと思います。

候補の皆さん、会場の皆さん、本当にご協力ありがとうございました。

文責・編集部